

福祉・介護の解決したい課題（例示） 2020 度

※例示を参考に取り組む課題を決め、各チーム具体的に部門別取り組み（①アイデア部門
②ものづくり部門）にて、取り組みをはじめてください。

テーマA 福祉当事者ニーズの解決	
A-01	<p>（顔の表情や思いを伝えやすいマスクやコミュニケーションツールが欲しい） 手話でコミュニケーションをとる人たちは、手話の手の動きとあわせて、顔の表情や口の動きから情報を補足しており、マスクをつけることで会話しづらい悩みがあります。また、認知症の人にとっても、顔の表情が見えにくいことで会話の内容や感情が伝わりにくい場面があるので、顔の表情を隠さない工夫をしたマスクやツール等を提案してください。</p>
A-02	<p>（視覚障がいの方の「おしゃれ」を支援） 視覚障がいの人たちも、洋服を選んだり、メイクをするなど、おしゃれして外出を楽しんでいます。外出準備に時間がかかってしまうのが悩みです。サポートのために様々なツールやITC機器が開発されていますが、使い易いツールの選び方、不足する機能の提案、使い方を学ぶ方法の提案などを期待します。</p>
A-03	<p>（車いすのタイヤをスマートに拭く方法） 車いすで外出から自宅等に帰った時、車いすのタイヤを自分でスマートに拭くことができるツールが欲しいのです。福祉施設の玄関には、畳一畳程のタイヤ拭き装置が置かれている場合もあります。もっとコンパクトで、安価に車いす利用者自身が操作できる器具のアイデアを提案してください。</p>
A-04	<p>（障がいのある人たちのアートをプロデュース！） 知的障害や精神障害の人たちのアート活動は、欧米では現代アートの視点から評価されており、県内でも障がいをてことして創作されたアートの発掘や商品化が試行されています。これらのアートやデザインを「売れる商品」や「価値ある作品」としてプロデュースする仕組みを提案してください。</p>
A-05	<p>（免許返納と中山間地の足の確保） 高齢者の免許返納の仕組みが整いつつありますが、公共交通機関の機能が弱い中山間地で暮らす高齢者にとって、返納しては生活できない本音があります。ハードやソフトの技術、公共交通機関や助け合いの仕組みづくりなど、様々な視点からこの課題を解決するアイデアを検討してください。</p>

テーマB 福祉・介護職場のイノベーション	
B-01	<p>（持ち物チェックの仕組み） ショートステイなどでは、入所時に入居者の持ち物を確認する業務に時間がかかり、退所時の持ち物紛失トラブルも少なくありません。最近の高性能で安価なICタグを活用して、経済的で現場で使える持ち物チェックの効率化や確実な管理についてアイデアや技術を提案してください。</p>
B-02	<p>（健康管理の基本となる身長測定が難しい） 医療や介護の現場では、高齢者の身長と体重を測って痩せすぎ、肥満など健康管理の指標としている。しかし、背中が丸まっていたり寝たきりで体が拘縮している高齢者の身長を図ることが難しく、一般的な方法であるメジャーを使った5点測定法でも、測るたびに実測値に大きな違いがでて不正確である。現場で使えるアイデアを提案してください。</p>

B-03	<p>(食事前用エプロンのデザインや素材)</p> <p>介護を要する高齢者は、嚥下障害で食べこぼしをしてしまうこともあり食事介助用のエプロンを使用することが多い。高齢者が介護を受けながらも楽しく、おいしく食事を楽めること。また、介護者の立場からも介護しやすい機能を満たすことなどに配慮しながら、食事前用エプロンのデザインや機能、素材を提案してください。</p>
B-04	<p>(外付け型「車いす自動ブレーキ」が欲しい)</p> <p>車いすからベッドやトイレへ移乗する際ブレーキをかけ忘れて転倒骨折してしまうことがあります。現在立ち上がった際に自動でブレーキがかかる車いすが市販されていますが、新規購入する必要があるため、単価も割高になってしまいます。普段使用している車いすに装着できる「立ち上がり自動ブレーキシステム」のアイデアを提案してください。</p>
B-05	<p>(緊急かどうか、判別できるコールボタンが欲しい)</p> <p>福祉施設に入居している重度の介護が必要な方は、食事終了や排せつの合図、たんの吸引などを頼みたい場合、コールボタンで職員を呼ぶ仕組みが一般的です。現状のコールは単一のメロディーのため、複数の利用者からコールがあった場合、用事の優先度を判断できないのが悩みです。現場で使える多機能コールボタンを提案してください。</p>

テーマC 災害と地域づくり	
C-01	<p>(様々な世代が参加できる防災訓練を企画して)</p> <p>甚大な被害をもたらした令和元年度台風第19号災害。今後に備えて、地域ごとに防災訓練や災害時支え合いマップづくりが取り組まれています。まだまだ若者の参加が少ないと感じます。様々な世代が参加できる地域防災の取り組みや訓練の方法、アイデアを提案してください。</p>
C-02	<p>(災害ボランティア、若者からの提案)</p> <p>令和元年台風第19号災害では、全国から8万人を超えるボランティアが集まり、被災地の復興の力となりました。学生や若者たちも、ボランティアとして大きな力を発揮しています。自分や友人たちのボランティア体験をもとに、災害ボランティア活動を通じた気づきや、今後に向けた改善点や工夫などを自由に提案してください。</p>
C-03	<p>(ソーシャルディスタンスを保ちながらも、地域のつながりを支える)</p> <p>直接会うことが行いにくい環境の中、人とのつながりを維持し、地域のつながりを大切にしながらつなげていくことは、社会性の維持や孤独死の予防にもつながります。高齢者世帯や離れて暮らしている一人暮らしの方とのコミュニケーションのツールや地域とのつながりを保つための方法や手段を提案してください。</p>
C-04	<p>(避難所やステイ・ホームで、子どもが楽しめ、ストレスをためない工夫)</p> <p>子どもたち、特に、幼児(3~6歳)にとって、遊びを通じて学ぶことが成長には不可欠です。「ステイ・ホーム」や災害時の避難所では、その遊びの活動が制限されることでストレスを感じてしまうことも多くみられます。避難所や限られた空間や時間帯での活動を想定して、子どもが身近でできる遊びや遊び道具を提案してください。</p>

作品制作への補足事項

○ナビゲーターの派遣

2020年度訪問講座「C. 共生・福祉の課題探求コース」の活用が可能です。各チームの選択テーマにあわせて福祉・介護現場に詳しいナビゲーターを派遣、学びを支援いたします。

問い合わせ

コンテスト事務局：長野県社会福祉協議会 まちづくりボランティアセンター内

☎026-228-4244 fax026-228-0130 メール vcenter@nsyakyu.or.jp